

「リサーチマインドを持った総合診療医の養成 合同公開フォーラム」に参加しました

平成 26 年 1 月 31 日（金）の午前 10 時から、筑波大学東京キャンパス文京校舎で開催された、「リサーチマインドを持った総合診療医の養成 合同公開フォーラム」に参加しました。

この会は、文部科学省が公募した、未来医療研究人材養成拠点形成事業のテーマ B 「リサーチマインドを持った総合診療医の養成」に採択された 15 のプログラムのスタッフが、それぞれのプログラムを紹介するとともに、今後もプログラム間の情報交換を継続して円滑に行うための、顔合わせ的な意味合いもある会です。



第 1 部は、特別講演として、文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室長の手島英雄氏から、「未来医療研究人材養成拠点形成事業について」と題し、今回の事業の発案の経緯、事業内容、採択された各プログラムに期待することなどお話しいただきました。今回の事業は、これまでの医療人 GP の成果をふまえて、これからの日本が向かう「超高齢化」と「人口減少」への対応を念頭に、地域の実情・ニーズに応じた医療人育成策を目標に構築されたそうです。各プログラムには、プログラムの着実な実施とともに、その成果を一般へ周知することも重要であることが強調されました。

第 2 部は、15 のプログラムを紹介するポスターセッションが行われました。それぞれのプログラムは、複数の大学が連携してコースを立ち上げ、研修医が循環するものや、地域医療研修を海外で行うものなど、いずれも特徴のある興味深いプログラムばかりでした。

ポスターセッションの後はそのまま軽食をとりながらの情報交換会となり、各プログラムのスタッフの先生から、プログラムのコンセプトや特徴、立ち上げ時の苦労話をお伺いしたり、今後に向けて、お互いを行き来して情報交換の場を持つお約束をいただけるなど、有意義で貴重な時間となりました。



第3部は、「本事業に期待される役割と今後の展望」と題して、パネルディスカッションが行われました。

まずは、座長の筑波大学附属病院総合診療グループ長・総合診療教育センター部長の前野哲博先生が、イントロダクションとして、総合診療医育成における大学病院の役割についてお話しになりました。大学は、総合診療の実地からは遠いが、豊富なネットワークと選択肢を持っている、地域における研究の拠点である、修了後もキャリアサポートが受けられる、など、総合診療医養成のコアになり得る、とのお話しでした。

国際医療福祉大学大学院教授の大熊由紀子先生からは、もともと新聞記者出身で医療関係者ではない立場から、日本では医療への満足度が低く、ひとつひとつの繋がりにから総合診療医育成を図っていくことの有用性を述べられていました。

北海道家庭医療学センター理事長の草場鉄周先生は、民間で総合診療、家庭医医療に取り組みされている立場から、大学の総合診療への地域からの期待について述べられていました。北海道家庭医療学センターでは、医学生・初期研修医の地域医療実習・研修の受け入れを積極的に行っており、家庭医療学専門医コースをつくり後期研修にも取り組まれています。また、家庭医療の第一線で活躍している医師向けにも、家庭医療理論、臨床教育、臨床研究、診療所経営などを学べるフェローシップの充実を図っているとのことでした。

聖路加国際病院院長で京都大学名誉教授の福井次矢先生は、プライマリ・ケアの歴史について、自らの欧米留学の経験についてお話しになりました。その経験から、大学病院における総合診療の意義とは、大学病院における患者の幅広い健康上のニーズに効果的、効率的にこたえられる医療を提供する、そのような医療（総合診療）を提供できる医師を養成することであると述べられていました。リサーチマインドを持った総合診療医を養成するために、様々な種類の診療現場を経験すること、診療における「個人の視点」と「集団の視点」、「地域の視点」を持つこと、つまり研究の方法論を身につけることが有用であるとお話になりました。



最後に、北里大学名誉教授・全国医学部長病院長会議顧問の吉村博邦先生からは、総合診療専門医制度構築の現状についてお話しいただきました。総合診療専門医は、扱う領域の広さと多様性があり、それをふまえて構築しているとのことでした。ポイントとして、地域を診る視点、ケア・看取りへの対応をあげられました。プライマリ・ケア連合学会の家庭医療専門医がベースになるそうです。質疑応答では、多くの先生方から、今まで体系立った総合診療医教育の後ろ盾がなかったこともあり、今回の事業への大きな期待が述べられていました。

今回の合同フォーラムで培われた他のプログラムとの繋がりを、私たちの今後の活動にも生かしていきたいと思えます。

